

「障がい者福祉の体験 in 台湾」

担当教員名 朝比奈 茂 宮川 路子

コース概要

日 程	2018 年 3 月 1 日～5 日
場 所	台湾 40454 臺中市北區學士路 98 號 臺中中山堂 Chung Shan Hall
参加人数	11 名（社会人学生 5 名含む）

コースのねらい

障がい者が国外(台湾)で音楽交流演奏会を実施する際、ソフト面、ハード面とも日本とは異なる中で、交流会を成功に導く様々な過程を学習します。また障がい者福祉活動に携わっている方々（職員及び障がい者の家族）と意見交換をすることで、障がい者の生活現状及び日本と台湾の福祉環境について理解を深めます。

内容

フィールドスタディー（FS）協力団体である「ゆきわりそう」は、本年度創立 30 周年を迎えました。その記念行事の一つとして、今回、台湾において、台中市の私立恵明盲学校の学生と台中市合唱団及び台中市行政の協力を経て、音楽交流演奏会を開催しました。その記念行事に、人間環境学部の学生が発から帰国まで同行する機会を与えられ、3 月 1 日(木)～5 日(月)の 4 泊 5 日に渡って、障がい者と一緒に台湾への旅に出かけました。今回の演奏会に参加した総人数は 192 名であり、関西空港から 1 便、成田空港から 1 便、羽田空港から 2 便、計 4 便での交流会でした。障がい者の方は（その程度にもよりますが）、日常自由に旅行など行けないため、家族や支援者のサポートが必要となってきます。健常者は自由に旅行に出かけられ、海外にも行けます。今回の音楽交流演奏会は、障がい者本人またはその家族から「記念に外国に行こう！」と声があがり実現したそうです。国内でさえ、移動手段や宿泊施設など、多くの課題がある中で、外国での交流会は、かなりハードルが高く様々な配慮や成し遂げるパワーが必要となります。今回の台湾の旅は、ゆきわりそうの職員の方々、その家族、その他関わってくれた全ての人の協力があったから、無事に終了したと感じております。

【日本での合唱練習】

参加学生は事前の学習として、休日にも関わらず、障がい者の方々と一緒に、数回の合唱練習に取り組みました。学生によっては、5 回の合唱練習に参加した学生もいました。曲目は「ふるさと」「台湾の歌」「ベートーヴェンの第 9」などです。練習会の時点では、今後、何が起こるか想像もつかなかったようです。

【3 月 1 日～5 日】

初日の天候は雨が降っており、終日移動で終わりました。飛行機に乗る際の手続きや機内での車椅子の位置、空港職員の対応など、多くのことを学びました。健常者ならすぐに通過したり、済ませたりできますが、障がい者と一緒になので、同じようには行きません。効率通りいかない事も、多々あり、全てにおいて良い経験になりました。



搭乗予定の飛行機（成田空港）



台湾桃園空港内で介助する学生



台中市中山堂コンサートホール

二日目はリハーサルの日です。本番の会場を使用し、お昼ご飯も会場内で食べ、終日練習に取り組みました。舞台の上には本番で一緒に演奏するオーケストラの席も用意されており、指揮者からも細かい指示が与えられ、成功するまで何回も練習を行いました。適度な疲労感が残り、緊張はありますが、比較的その晩は、よく眠れた模様です。

三日目は演奏会当日です。学生の皆さんも、日本から持参した黒の正装で本番に臨みました。合唱を行うメンバーは、台湾からは私立恵明盲学校の学生さんと台中市合唱団の皆さんです。時間が迫るにつれ観客が徐々に集まり、1600席ある会場は、開始前に満員状態。チケットも事前に完売したようです。司会者による煽動、掛け合い、笑いあり、歓声ありの楽しく、充実した演奏会でした。

四日目はそれぞれの担当する障がい者と一緒に終日、台湾の観光を楽しみました。とはいえ、本学学生諸君は、常に支援サイドにいるため、観光のサポートとして活躍しました。

五日目の午前中は自由行動、その後日本への帰国となりました。

学習を終えて

5日間の旅で障害を持つ方と過ごして、障害について考えさせられることがいくつかありました。身体的、知的、精神的な障害を持つ人もみな健常者と平等であるという点です。私は今まで、ハンディキャップを抱える人とともに関わったことがありませんでした。今期履修している授業の中で学びましたが、そうした方々は健常者用に作られた社会が生きづらいことから外にあまり出られないそうです。しかし、誰もが幸福になる権利を持っていて、障害があるからといってそれが制限される理由にはなりません。今回、健常者とハンディキャップを持った人がみんな一つになって歌ったことで、みんな平等なこと、同じ喜び、楽しさを共有していることを感じました。私は今まで、あらゆる障害を正しく理解していませんでした。知的障害のある人だって「ありがとう」も「ごめんね」もきちんとすることができます。感情のコントロールが上手くできないことを本人も自覚していて悔やんでいる人もいます。障がい者というレッテルを貼らず、一人の人として向き合ってその人がどんな人かを知り、自分がどのように行動したら一緒に社会へ出られるか考えることが本当の福祉なのではないかと思いました。 (FS 参加学生報告書から一部抜粋)



交流会前日のゲネプロの風景



交流会終了後、成功を喜ぶ参加者と社会人学生



コンサートホール内にあった交流会の横断幕



交流会終了後、達成感溢れる学生と参加者